
Dancing in hte yellow 後編

AZMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a n c i n g i n t h e y e l l o w 後編

【Nコード】

N 0 5 1 2 T

【作者名】

A Z M A

【あらすじ】

D a n c i n g 後編です。すべての謎は明らかにすべきなのか…それは読み解いた貴方の心で決めて下さい。

夜に至り、私が倒れ込むように床に就いたのは日付も変わった頃だったろうか。私の神経は昼を過ぎて恐ろしく冴え渡り、涼が帰ってからも風に踊る火の如く意識が張り詰め、怒濤のように私は土と向き合い続けた。意志の濁流を堤で御し、大海へと導くために手のひらに、指先にその全てを注いだ。まるで荘厳なオーケストラの重奏のように高揚し、身を沸き立たせ、歴代の王たちが思い描くままに民衆を仰いで国を建てていくのと同じ感覚で、私は思いのままに土に触れ、その形を具現のものにしていくことができた。一気に作業場の棚に新参加が増えていった。私は内心とても満足し、まだ高ぶっていたが、しかしもう体は疲弊し悲鳴を上げていた。研ぎ澄まされた感覚に切りつけられ、消耗しきっていた。自身の歳のことなど考えたくもないことではあったが、鉛と化す体にこれ以上の融通を期待することは出来ず、私は窘めるようにスコッチを煽り、ベッドに身を投げた。昼間、日のあるうちに涼が功績を残した洗い立てのシャツが、横たえた体に染み渡るような眠りを与えてくれる――はずだった。

なぜだろう。アドレナリンに漬け込まれた神経がありもし得ない妄想をかき立てていた。夜が深まるのを感じ、曖昧に意識を混濁させようとする私はいつしかベッドの上に身を置いたはずなのに、その体がどうしたのか、箱の中に閉じ込められるのを知った。身の丈いっぱい四方を仕切る木の板に阻まれ、腕も足も広げることが叶わなかった。ぼんやりと目を開けたとき、私は自身が透明なガラスの覆いが備えられた箱の中に入られていることに気付き、不規則な振動が私と箱とを揺らし、どこかへと運ばれているようだった。私の目の前を、というよりは上に掲げられていたものであるう、街

頭の光がゆつくりと通り過ぎていくのが見えた。阿弥陀のような市街の道を駆けゆく風の音が聞こえ、寂しげに鳴いた鳥たちの群を成して飛びゆく音も、雨だろつか、おそらくはやがて雪に移り変わっていくことを感じさせる曇混じりの雨粒が、サスペンションを軋ませ車輪を回す鋼鉄の箱の天蓋を打つ音までもが響いてくる。火を焚きつけられたように私は力づくで箱を破ろうともがいた。しかし頑丈に打ち付けられた箱の壁はびくともせず、またそれを叩き蹴りつけた音は一切外へは出て行かなかったように思えた。声を出すこともできない。狭いガラスの覆いから、車外の景色がわずかに見える。私の知る街とは思えなかった。夜だったのかもしれない。景色に見える家屋の全てがコールトールでも塗りたくられたように黒に、否、黒よりも深く重く暗い色に染まっていた。あらゆるコントラストを押し潰された家々の中で、かすかに中の明かりを思わせる光を私は目撃した。その家の前に誰かが立っている。浮かび上がるような白いドレスだった。曇らせた表情、哀しい目で、その人が棺の中の私を見下ろしている。私は必死に叫んだ。叫んだつもりだった。しかし、世界は再び闇の中に没し、何も見えなくなる。恐ろしさに耐えかねて私は目を瞑った。何も、あらゆるものを見なくなかった。見えてはいけなかった。やがて車輪の音が途絶え、揺れが止まった。私はただひたすらに目を閉じて息を殺した。次に聞こえてきたのは、引き摺るような、人の足音とは思えないものがゆつくりと私を閉じ込める箱に近づき、うろつくと彷徨うように周りを徘徊する音だった。巨大なナメクジか、塊になって蠢く蛆虫が近くにいるような、吐き気を催すほど不快な足音と饅えた匂い。耐え難かった。まるで眼球をほじくり出されるような感触に、私は強制的に目をこじ開けられるのを感じた。もはや自らの意志からも離れたその眼が見たもの。それは青白く、膨れた皺を幾重にも刻みつけ、生気を一切感じさせない双眸で私に見入る、狂った能面のような者――

奥歯が砕けるほど食いしばり、全身を鋼のように硬直させシーツ

をきつく握りしめて、何かを叫びかけた私が意識を取り戻したとき、そこは棺の中ではなく、私の寝室だった。天井の木目が緊張した様子で私を見下ろし、朝の冷気が淀んでいる。いつから呼吸を遮っていたのか、私は深海から釣り上げられたように萎みきった胸の中に思い切り息を吸い込んだ。窒息寸前を物語るかの如く荒い息づかいが音を忘れた部屋に染み込んでいく。凍り付いた我が身から薄氷を砕き剥がすように、生まれたての子馬よりもぎこちない動作でやつと体を起こす。全身に冷や水でもぶっかけられたかのようなだった。汗の呼び水に冷酷な空気が切りつけてくるが、寒さを感じなかった。外がかすかに白んでいるのを見る。およそ普段、私が目を覚ます時間に変わりはなかった。

だが夢の中の感触が、途切れることさえなくまだ私の中に渦巻いている。不穏の気配がすぐ近くにあるという確信すらある。棺の、私の周りを彷徨っていた、あらざる者の気配だ。わずかに鼻につく匂いさえ残されているような気がする。地獄へ赴くような思いで私はゆっくりと、物音の一切を立てぬよう用心しながら寝室の扉へと向かった。意を決して戸を開き、廊下に出る。朝の明るさが差し込む廊下はただ静まりかえり、押し黙っているように思えた。慎重に、恐ろしいものを目覚めさせないような足取りでフローリングの上を進み、私はリビングに入った。

信じがたいものを、そこに私は見た。

リビングにあったものの全てがひっくり返され、収められていたものの全てが床にぶちまけられていたのだ。

「先生、先生！」

金切り声をあげて飛び込んできたのは涼だった。彼女の声がしたとき、私は作業場において、ぎよつとした悲鳴を聞きはしたものの、そこに駆けつける気力も奪われていた。家中を探し回った挙げ句にやっと涼が私の姿を見つけ、背中に飛びついてきても、私はよろめいただけで何の反応も起こせはしなかった。

「先生、何があつたんですか？ あんな、家が、めちゃくちやに……」
「全部ひっくり返していったようだな」

魂ごと抜き取られたように呆然と家の中を回った限り、私の家の部屋という部屋のあらゆるものが倒され、中身を引っ掻き回されていた。茶碗や花瓶などの割れ物は全て割られ、庭に至っては花が踏みにじられていた。そして私の最後の希望さえも……。

私が絶望と共に見つめる先に涼も視線を送り、息を呑んだ。作業場の棚にあつた作りかけの器たちが皆、床に叩きつけられ、潰されていた。ようやく乾きかけていたものは割れて飛び散り、まだ若かった土は泥のように広がっている。狂気すら感じる、私の癪癢よりも遙かに暴力的な悪意に、彼らは残らず陵辱され尽くしていた。屈み込んで潰れた遺骸の一つを拾い上げ、私は両の手で握った。

「これで、みんな、なくなつてしまつた」

かすれるような、弱々しい声が私の口から漏れ出る。それ以上は何も言えなかった。涼が私の背にすがりつき、きつく抱きしめ、啜り泣いた。

+ + +

後の警察が私の家に立ち入り、中を検証したところでは、およそ望むべくもなかるう金目のものには、床にぶちまけながらも一切手を付けることなく、ひたすら執念深く徹底した態度で家財の一切をひっくり返していったらしいことが告げられた。もしかしたら、奴は何かを私の家の中に求め探していたのではないかと。涼は必死に一昨日の早朝に目撃した男の話をし、私はいつになく深い眠りのためか、気配を感じたのみで結局その姿を直に見ることがなかったと言っしかなかった。およそ情けない話であろうが、彼らもまたいくつかの報告が寄せられていたことこそ知っていても、涼が語るよ

うな男を実際に見た者はなく、断定するには至らなかった。

「先生」

呼ばれ、幾度目かに私はやっと意識を取り戻した。

「お茶、冷めちゃいましたね。淹れなおしましたか？」

私はカップを握りしめたまま、我を失っていたようだった。

「あ、ああ…すまない」

申し訳なくカップを渡すと、涼は何も言わず新しい茶葉を用意して湯を沸かし始めた。ハーブティーが淹れられるのを待つ間に、私はタバコに火を付けて窓辺に立った。庭までもが悪意に晒された傷跡を如実に残している。

「冬牡丹が…」

「え？」

私がぼつりと呟いたのに、敏感に涼が反応した。

「冬牡丹が折られている。山茶花も」

それは冬支度の頃から涼が手を吐息で温めながら世話をし、花をつけるに至った、去年から今年にかけてようやく庭に咲いた冬の彩りだった。長年放っておいた私の庭の土は、決して花が咲くのに適したものではありえなかった。それを涼は丹念に、根気強く掘り起こし肥料を蒔いて少しずつ開墾していた。初めはほとんど一切の花や草木が根付かなかった。少しずつ、少しずつ、やがて私も巻き込んで、一昨年の冬に一度畑仕事ながら二人で鋤を持って土を洗いざらい掘り起こし、花を植えるために煉瓦や石を並べて花壇を設けた。そうしてようやく、さらに涼の地道で熱心な世話の甲斐もあり、雑草ばかりで荒れ果てていた私の家に花が彩りを添えるようになったのだった。その苦心した花壇さえも踏みつけられ、花が土にまみれ潰されているのを私は見てしまった。

涼が窓辺にやってきて、私と同じように庭を見た。私たちは言葉もなく、ただ残された傷跡を眺めるしかなかった。しばらくして、私の隣で涼がまた鼻を吸った。

「すまなかつた。私がもつと用心していれば」

「いえ、いいんです。ただ、悔しくて……」

目に涙を溜め、涼は続けた。

「先生があんなに頑張つて、大切にしていた器をみんな壊されたのが、悔しいです。あんなの、ひどすぎる……」

そう言つて唇を噛みしめる涼に、私は何も言えなかつた。心に、大きな風穴が空いてしまったように、私の中の何かがそこからすり抜けていつてしまうようだった。俯くしかなかった。

「不謹慎でごめんなさい」

唐突に涼が言った。わけもわからず、私は顔を上げた。

「でも、私はあの時、安心したんです。家に入って、中が荒らされているのを見たときにすごく怖かつたんです。先生がどこにもいなくて、もしかして何かあつたんじゃないかつて思つて、パニックになりそうで」

涙が一筋、その白い頬を伝う。涼は私を見上げ、震える手で袖を掴んだ。

「見つけたとき、先生に何もなくてよかつたつて思つたんです。棚の器が割られているのを見ても、でも、怪我をしたわけじゃないつて、器なんかどうでもいいつて」

震える声を、私は自ら遮つていた。もうこれ以上聞いていられなかつた。何も言つてほしくなかつた。しかし、得てして開かれてしまった胸の扉を再び閉ざす術を私が知る由もなく、ただ目の前で涼の小さな体が壊れてしまいそうで、愚かしいことだが、私は自身が自覚するよりも先に彼女を抱きしめていた。

「いいんだ、涼。もういいんだ」

言つてしまひたかつた。何もかもをぶちまけて、ここで話を終わらせてしまふべきだった。私は大丈夫だと嘘でも吐いてしまふこともできる。器などいくらでも作り直せるのだと強がつてしまえばいい。蛆虫になど好きなものをくれてやると曰つても構わない。その、いくらでも思いつく限りの言葉で、涼を突き放してしまうことは容

易だった。しかし私は何も言えなかった。ただ、如何なる勇氣でも
つてそれを成し遂げることは出来うるはずもなかった、涼を抱きし
めて、私は自らに封印した思いを抑えることができなくなっていた
のだった。そして私の行為が、涼の最後の殻を破らせた音を聞いた。
「ごめんなさい。でも、私は先生のことが心配なんです——」

+ + +

夜が明ける。あたかも宿命のように。

夜闇と朝の青を分かつ境界の下、まるで訝しむように切れ切れに
雲が見下ろす中を、私はまた日常、そうであつたように歩き慣れた
山の獣道を一人、ある場所へ向かい進んでいた。

昨日、私たちはその後で、残された暴力の痕跡に対し、無言で跡
形もなかったかのようにすべく、黙々と片付けに追われた。私の家
が大きいと思つたことは一度もないはずだったが、中の家具に至る
までをひっくり返された惨状に、作業は必要以上に難航した。とて
も二人だけで短時間に済ませることは不可能だった。が、他から応
援を求める気にはなれず、また涼はそれを快くは思っていないかつた
のかもしれない。平時に倍する活発な動きで彼女は次々に家財道具
をまとめ、私と共に自らより大きな家具を立て直し、元あつた場所
へと戻していった。私も負けじといつになく動き回つてみせたもの
の、しかし夜半に至つても片付けられたのは全体のおよそ半分とい
つたところだろう。今日もまた、ほんの一月も前、年の暮れにやつ
た大掃除よりも大がかりな片付けを私たちは強要されている。結局
夜になつても帰れず、またさすがに疲れてしまったのだろう。いま、
私のベッドには涼が身を横たえ、束の間であるう深い眠りに落ちて
いる。私はあれから一度も眠っていない。それを拒否していた。

私はずっと思案していた。

家の中に産み落とされた混沌を整理しながらも、私の心の中は常に火をあてられたように焦燥し、また戸惑っていた。あるいは浅はかであったかもしれない。涼に教えと導きを与えてきたその主が仰せられるような、善良というものが私には欠落している。良心すら臆気な私が、それに気付きながらも開かれなことを願ってきたものはもはや白日に晒されてしまった。だが、私は私自身を、また涼を欺くような真似はこれ以上できないことをすでに感じ取っていた。私の中で、もう涼は切り離すことはできない存在になっていたのだ。ある時を境に私はすべてを、あらゆるものを拒絶して在ることだけを望んできた。これから先において、自らの心の中に住まうものなど存在しないと。あの記憶の果て、私は誰も愛せず、また誰からも愛されざる者になりたかった。私にそれを決意させた、土と向かい合い、器に己の真意のすべてを注ぐことを除いて、あの日に至るまで燃え続けていた純粹な情熱は奥深く、今は万木の森に埋められている。それでいて、まことに馬鹿げたことではあるが、心のある場所に誰かが敷居を跨ぎ、入ってくることを待ち望んでいたのだろう。その誰かとは、言わば希望であった。希望がどこからか入り込み、私に語りかけてきてくれるのを待っていたのである。待ち焦がれた声は叫んだのだ——「否！」それは私の中に、永久に埋もれてしまったかに思われた心を、その再生を叫ぶ声だった。教会の告げる鐘の音のように、それは私に響きわたり、福音をもたらすのだろうか。もはや私に、かつて高野川のほとりを私と歩き笑みを見せていた玲子の面影は、その声はもうなにも語りかけてきてくれることはないのだろうか。それをも希望は叫ぶのだ——「否！」。

夢のままであって欲しかった。私は涼の幸せを願っていると言った。それは今なお変わってはいない。未来への意志ある者たちに彼女が導かれ、私のような泥を這いずる者からは遠ざけられてしまえばいいと。涼にはそうした未来があるべきなのだ。行く末に立つ教会で、ヴァージンロードの先、あるいはまだ見ぬタキシードに身を

包む男と、自らと共にその名を刻み彫金されたプラチナの指輪が彼女を待ち、気の置けない友人たちに祝福され、花とハーブの香りの中で駆け回る子供たちへの笑顔に満ち溢れ、築いていく温かな家庭……今の涼にはそうした前途を見通すことが出来る。きっと私とでは思い描くことも出来ない未来だ。それをわかつていながら、しかし涼は私への思いを打ち明けたのだ。東西を分け、強固で高かった彼の壁を思わせた扉を開き、その狭い隙間から流れ打つ心を絞り出すように言葉に乗せた涼。彼女を抱きながら、私は菅原の辰徳のような男を愛するべきだと諭したが、流れを塞ぎ止めることはかなわなかった。どのみち受け入れるより他にないのだろうか。熱に煽てられた時期を過ぎ、もしかしたら涼はすべてに嫌気が差すかもしれないと私は思った。私自身がそれを思ったとしても、私はきっと彼女に知的な好意を寄せることも出来るだろう。しかし、私には不釣り合いな妻が、彼女にはふさわしくない夫が、一時は共にあることを願ったとしても、やがて夢の時を過ぎればもはや同じようにはやっていけなくなる。その時、私と涼は、二人とも不幸になってしまっただろう。だからこそ、私は心を閉ざし夢のままであろうとしていた。私はなお、思案し続けている。

だが、もはや途絶えたものと思われていた火は凱旋し、重く、楔のように穿たれた石の柱は明るく照らされている。プラトニクな関係であると曰えば虚しく離れ、あるいは言葉や誓い、交わりすら機械的にこなす人たちのようにはなれない。また涼を前にそのような態度であることを、私は自身に許しはしないだろう。例えばこれ涼の目が覚め、何かに違和感を感じるときが来たとしても、その時はその時であり、なるようになる。いま彼女が私の中に足を踏み入れようとするのなら、私は私の心で以てそれに応えよう。涙と共に自らの心を開き見せてくれたように、私もまた自身の思い、願いのすべてを涼に明かし、託そう――

薄暗い森が途絶え、徐々に視界が明るくなっていく。友のように思つて久しく、慣れ親しんだ山の頂上にほど近い場所。木々が途絶

え青い空が広がるその下に、打ち立てられた九本の石の柱がある形でもって並び、私に相對している。雨の記憶の果て、雪深く大いなる正午を思わせたあの時に灯した私の心は、今はここに埋められている。日が昇り早朝の色が薄れゆく中、じきに涼は私のベッドで目覚め、階下へと降りる。まだ片付けきらない廊下を越え、リビングに入ったとき、彼女はテーブルの上に置かれたメモを見て私の中の重大な友情を知ることだろう。そこには「今夜十一時。夜空に星があつたら出掛けよう」と記されている。

+ + +

航路は開かれた。昼を過ぎた頃に現れ、私を焦燥させた薄雲たちは夜が訪れると共にどこかへと去っていった。

私と涼はなお家の片付けに追われていたが、およその家具を立て直すことこそなんとか順調ではあったものの、その中身を整理して元あった場所へと戻していく作業にひどく手間取っていた。どういうわけだか、そこに収められていたものを元に戻すだけだというのに、引き出しの中は溢れかえり、同じように収まらないのだ。それ以前に破裂寸前のようになるまで押し込めていたわけではないのに、そんな片付けを私が、なによりも涼がやっているわけではない。にもかかわらず、具合良く整理することができなかった。私の家がこんなに容量の狭いものだったのか、あるいはこんなにも雑多な物が増えていたのかと訝しむほどだった。そこに、さらに部屋の隅々に隠れ潜んでいた埃などが表舞台に躍り出てきたこともあり、彼らを退去させる手間も手伝って、一部屋にかかる労力と時間は膨張を続けるばかりであった。昨夜までに半分程度は片付けたものとしてい

たのは、ペテンの如き樂觀であつたらしい。空の青がダークブルーへとコントラストを落としていく中、拭き掃除と小物どもの整理整頓に脳髓をねじ切られそうになっていた私は、夜闇の下で朧気な星明かりが灯っているのを見、無様にも救われた気分を味わうことになった。それでも涼は実に熱心に働いていた。部屋の扉一つを開けては火を注がれたように果敢に挑んでいき、瓦礫の山を思わせる惨状に切り込んでいった。あつという間に混在する小物の類をそれぞれの収納にあつた場所へと仕分け、私に的確な指示を与えて家具などは所定の場所へと戻し、物が退けられ顔を見せた床を磨いていった。その鮮やかでてきぱきとした動きを前に、私など、どれほどの足しになったであろうか。一人であつたらすべてを片付けるためには家に火を放つことを思いつきかねない事態に、ただ途方に暮れるしかなかっただろう。空がすっかり夜に落ちる頃になり、 unnecessary 物は捨てて整理するしかないと言はれて私に宣告したが、むしろよくそこまで粘り強く頑張ってくれたものだと思う。私はもはや異を唱えるようなことはせず、彼女の提案を受け入れた。が、そこまで至るのにすでに一日を使い果たしてしまっていた。私たちは残る作業を明日行うことに決めて、夕食を二人で取った。

「すまないな。今日も泊まってもらうことになりそうだ」

すでに夜も半ばになろうという頃になってしまっていて、とても下界の街へとおるために山を歩くことが出来ない時間に、私は涼に大変申し訳ない思いで、そう言った。涼はきょとんとして応えた。「私は大丈夫ですよ。それに、今夜はどこか連れて行ってくれるんでしょう？」

その言葉に私はきつねに摘まれた気分になった。なんだ、覚えていたのか、と。今朝、私が家に戻ったとき、テーブルの上に置いてあったメモはなくなっていたが、そこに書かれていたことについて涼は私に何も問うことはしなかったからだ。朝食も早々に片付けと掃除を始める彼女に、もしかゴミか何かと間違われて捨てられてしまい、彼女はその内容を知らないのではないかと思ったのである。

る。その後も涼の熱心な様子に聞く頃合いも見出せず、私は一人勝手に今夜の行動は家の中が落ち着いてから改めて打ち明けるべきかなどと考えていたのだ。私がそのように話すと、

「だって、せっかくお出かけするのにやることが残っていたら気分が乗らないでしょう。だから頑張って今日中に終わらせてしまいたかったんです」

と、涼は返した。なるほど、あの十二気筒エンジンさながらの高回転ぶりは、そういうことだったのか。残念ながら明日に回す作業が出てきてしまったが、それはそれで明日やれば良いだけのこと。夕飯に使った食器を洗う涼はすでにその気になっていて、鼻歌でも聞こえてきそうなほど子供のようにわくわくとしているのが見て取れた。果たして、彼女の期待に応え得るほど楽しいことがあの場所にあるだろうか。一抹の不安を感じはしたが、私は洗い物が終わるまでにと急いで支度を始めた。

私の家が身を置く山はそれなりの高さはあるものの、決して大きな山であるわけではない。ただ夜も半ばに差し掛かるうという時刻もあり、涼には特に温かい格好をするようにと伝えて、私たちは家を出た。本格的な登山用の装備が必要というわけではなかったが、この真冬の時期、あの場所は風も強く冷える。基本的なものを除いて私が欲した荷物はランタンと地図、方位磁石と納戸から引っ張り出した手製の瓶とスピリットだったが、涼のリクエストでさらにペットボトルに分けた純水と小さなパン、五徳を備えたガスバーナーがザックの中に追加された。向こうで温かい物を飲もうと提案されたためだった。

「山の上に星の見える場所があるんですか？」

「ああ、この時期は空気も澄んでいて、とても綺麗なんだ」

火を灯したランタンを持って私が先導し、涼は暗い森を興味深そうにキョロキョロと見渡しながら後をついてきていた。

「なんだか不思議な感じ。夜の森なんて歩いたのは初めてです」

「足元には気をつけて。木の根が張り出しているところがあるから――」

と、私が振り返ろうとしたところで、言った側から短い悲鳴をあげて涼が躓いた。案の定、獣道の脇から張り出す木の根に足を取られてしまったらしい。前のめりに倒れそうになるのを私はランタンを持つ手とは逆側の手を差しだし、半身で涼の体を支える柱になった。

「ご、ごめんなさい」

はっとして涼が身を起こす。私の家に通って三年あまり、ずっと下界の舗装された街で暮らしていた彼女もいい加減、山道にも慣れているはずだったが、足元も見通せない夜とあつてはさすがに勝手が異なるのだらう。私は万一はぐれてしまったときのことを考えて懐中電灯ではなく周りに明かりが広がるランタンにしたつもりだった。が、そもそも涼は私を頼りに歩いているわけで、そうしたことを考えるくらいならより安全な手段を講ずるべきなのだった。

「怪我はないかい？」

「はい。大丈夫です」

「もう少し歩くけれど、森を抜ければ歩きやすくなる」

そう言っただけは、可能な限りぎこちなくならないように涼の手を取った。白くて柔らかい手の指先がひどく冷えているのが伝わってくる。どこぞの青二才でもあるまいに、やや気恥ずかしく、涼の反応を待たずして私はランタンの光の射す方へと向き直り、歩を進めた。気も利かず、そこから私たちは互いの手を握ったまま、しばらく無言のまま夜の山道を歩くことに集中していた。

上空の風を遮り、眠りに就く森の中はひどく静かだった。押しやられた闇の先で葉裏の住人たちがひそひそ話をしながら、ランタンの明かりを嫌い身を寄せ合っただけ影の中に逃げていく。闇色にかすかな穴を穿つ火の輪の中を歩き続けて四半刻もしたところだったろうか、森の暗褐色の中にわずかにコントラストをあげた色をようやく私は見通した。森が終わり、その出口となつた場所に差す星明かりの色

だった。

木々の合間を抜け、夜の視界が開けるのを見たとき、私の背後で涼が小さく感嘆の吐息を漏らした。覆い被さるようにさえ見えていた暗い森のヴェールが取り払われると、夜空が私たちを出迎えてくれたのだ。昼間、雨をもたらずのではないかと私を心配させた暗鬱な雲は気配さえ残さず空の遙か彼方へと姿を消し、煙るガスは眼下の麓へと風に押し込められているのが窺える。遮る物は一様に退けられ、今夜は月もなく、想像しうるよりも多くの星々が宝玉を敷き詰めたドームの天蓋のように煌めきながら私と涼を見下ろしている。街灯も少ない閑静な地に住む涼も、これほど広く、また深い奥行きを感じさせる夜の星たちの並びを見たことはないだろう。山頂の凍えた空気やなだらかに流れゆく風がそう思わせるのか、数多の輝きの、手も届かんばかりの光に歓迎され、瞳の中に彼らを映し出して涼は夜空を見上げていた。私はそんな彼女の手を引き、ついに目的の場所にたどり着いた。

「ここは……？」

私が手を離したことに気が付いて視線を戻した涼が見たのは、夜闇に溶け込むような漆黒の石柱が九本、V字を描いて立ち並ぶ光景だった。まるで墓標のようにそびえるモノリスの足元へと私は歩いていき、ひざまづいてザックを下ろす。中を開いてガラスの瓶を取り出し、蓋を開いた。ランタンの火に照らされ、瓶の中身は琥珀を溶かし込んだように透明な金色を返している。彼の者が愛した荒涼の風の香りを嗅ぎ、私はピースハイルとエレシノの精油にスピリットを注いだ。限りなく純粋に近いアルコールと精油は瞬く間に混ざり合い、互いの境界を曖昧にすると、淡い翡翠の色を帯びた液体へと変ずる。その様子を、私の隣に屈み込んで見ていた涼が訊ねた。

「これは何ですか？」

「土と水の結晶を混ぜて蒸留したものだ。これに草木の繊維を寄り合わせたものを浸して火をつける」

モノリスの下には拳ひとつ分ほどの窪みがあり、小皿が備えられ

てあつた。私はその小皿にゾドムの打ち紐を横たえ、翡翠色の混成油を慎重に垂らす。小皿一杯に満ちたところで打ち紐が油をたつぷりと含むのを見、ランタンから取り出した種火を移すと、それはモノリスの足下で煌々と燃え、黄土の光を放った。光はモノリスの中を、夜空へと向かい駆け上がっていき、焰の揺らめきが漆黒の石の柱に明滅する幾何学的な模様を浮かび上がらせる。残るモノリスにも同じようにして火を灯していくと、山頂にほど近いこの場所に、星が見守るその下でV字の光が描きあげられた。最後のひとつに混成油が足りたことに安堵した私は瓶に蓋をし、涼の元に戻った。

「よかったよ。もうピースハイルもエレシノも最後だったから、これでダメなら永久に見せることができなくなるところだった」

涼は火の光に魅入られ、モノリスの不思議な明滅に口元で手を合わせ、ただ「綺麗……」と呟いた。

「涼は、確か牡牛座だったね」

「ええ、そうです」

私の呼びかけにしばし惚けていた涼は少し驚いたように応えた。

彼女がとても感動してくれていることに私は誇らしい気持ちになり、方位磁石で南を確認し、その方へ指を差した。

「あっちの方だ」

「なにがあるんですか？」

「今の時間、あの辺りに牡牛座が出ているんだ」

私は南中する輝星と星団の名を挙げ、星座の並びを涼に教えた。

涼は少し戸惑いながら、私を真似て南の空を指差して牡牛座を探した。

「ええと、あの三つ並んでいるのがオリオン座で、その右斜め上の方に明るい星がアルデバラン、でしたっけ。その上に昴があつて、それと——」

涼はゆつくりと、丁寧に確認しながら星の名と、その並びを指先で描いていった。あるいは星の地図でもあれば、すぐにでも理解するに至ることが出来たのかもしれないが、あいにくと私にそんな物

を用意するほど気の利いた頭はなく、またそれを持っていようはずもなかったのだった。私たちは時間をかけて牡牛の角とその体軀を形作っていった。

「星座の形なんて学生の時以来です」

と、牡牛座を見つけるまで時間がかかったことに、涼は肩をすくめて言った。

「でも先生が星に詳しいなんて、知りませんでした」

「いや、私もあんまりよく知らないんだ。この冬の時期の星座は少し調べた程度のものだよ」

じゃあ、どうして、という涼の表情を見、私は後ろを指した。光を衣のように纏うモノリスのV字が、なお絶えることなく揺らめいている。

「これは牡牛座を模したものなんだ。星占いで使われる記号に似ているだろう」

涼はモノリスの並びと、空の配列とを交互に見比べて納得したように私に笑みを見せた。

「狙っていたわけじゃない。でも気の利いたものを選び出せるほど私の持ち物も多くはない。だから、こんなものしか、きみに見せてやれるものがなくて……」

ここは私にとっての約束の地。誰しもに不便だ危険だと言われてなお、心を置いて離れることができない場所。これまで誰にも、どんな時にあっても、その存在を明らかにしてこなかったこの地に、他者を招き入れたのは涼が初めてだった。だからこそ、誰にも教えなかったからこそ、私が、私自身の心を明け渡すことができるのは、ここをおいて他にはなかった。モノリスの炎に向き合い、ひざまづいて赦しの秘跡を乞うが如く、私は自らの井戸の奥深くを流れる隠された水脈に光が差し込むを感じ、ひどく透明で純粋な清流が囁くのを聞いた。ひとたび発せられた水の音は強く、あまりにも遠く隅々に響きわたるようで、私は一度言葉を遮る。風に、星の輝きに救いを求めて上を見上げた時、すべての決意は完遂されたことを知

った。

光なき闇の中を流れ続けた思いを汲み取って、私は涼に向き直る。じつと私を見つめるその瞳に、今度だけは視線を逸らすことなく、言わなければならなかった。

「涼——。私は……私はきつときみを幸せにはできない」

かすかに目を見開き、しかし涼は何も言わない。

「今の私にはきみの望むことを叶えてはあげられない。必要だと求められても、何も渡すことが出来ない。応えようと思ってても、ここにいる限りどうすることもできないと思う」

星の流れが、私にその一步を勇気づける。

「だから、私は山を下りるよ」

思いのすべてを希望に賭けて放った私の告白に、あまりに意外だったのだろう、涼は驚いて口元に手をやった。何かを言い掛けているようにも見えたが、私は続けた。

「いいんだ。もう何も、ここには残ってはいない。麓の街でやり直そうと思う。小さな平屋で。環境が変われば土も変わってしまうだろう。けれども、またそこから、一から作っていけばいい……」

そんなにも頼りなく見えたのだろうか。心配する目で涼が私の腕を掴んだ。また、彼女が近くにいると感じて、ほっとする自身を思い、私も涼の手を取る。

「私は、大丈夫だよ。器を潰されたとしても、それにはもう慣れてしまったさ。何度潰されても、その度に作り直していけばいいんだってことも知っている。時間はかかったとしても」

まるで、これ以上は続けさせまいとするかのように、私の袖を握りしめる手に力が込められ、涼が私に身を寄せる。胸の中に隠れてしまった彼女がどんな表情であるか、私にはわからなかった。が、私はその華奢な体を、花を包むようにそっと抱きしめる。

「涼、それでもきみは、そばにいてくれるかい？」

私の心臓のすぐそばで、涼は何度も頷き、言った。

「はい。私、先生と離れたくない……」

それは確かに、私に届けられた。

「ありがとう。私もきみと離れたくない。山を下りたら、ずっと一緒だ」

山の風が舞う。雲を散らし追い立てたその笛の音に惹かれるようにしてモノリスの炎が光を増す。風の澱みをものともせず黄土の光に呼応する星の輝きは、いつしか強くなっているように感じさせた。空と大地の狭間、双方のアルデバランに見守られる中で、私たちは唇を重ねた。

4 .

雲も雨もなく、ただ風の流るるまま。私たちは嵐の中に身を投じ、溶けて混ざり合うことを願うようにして互いを求め続ける。解き放たれた胸の扉を感じながら、それでもなお聳え分かつ双壁を重ね合わせ、その奥に、暗がりの中にあるう光を欲して、夜が明けるまで、あさましいほど、狂おしいほど――

目を覚ますと、寝室のカーテンは半分だけ開けられていた。押しやられていた曇たちが舞い戻ってきたのか、窓の外が純白に染められているのが見える。意識が溶けて闇に落ちるほんの少し前、こうすることで安心すると囁き、重ね合わせてきた涼の手のひらの感触はまだ私の中に残されているように感じられたが、ベッドの中は私しかおらず、毛布に彼女の痕跡が抜け殻となつてあるだけだった。いつにない、体の気だるさを覚えながらも起きあがると、どうやら時刻はすでに昼頃になっているようだった。切りつけるような冷気は柔らかく、帯紐を解いた暖かみを覚えており、朝のそれとは異なっていたからだだった。しかしどこかに忍び寄る気配のような冷気は

ベッドの足下に澱んでおり、私はある予感を胸に、服を取ると寝室を出た。窓越しにバルコニーを覗いてみると、白く濃い霞の中に消えてしまいそうな小さな背中を見つけた。

「おはようございます」

出窓を開けてバルコニーに足を踏み入れると、気が付いた涼が振り向いて笑みを見せてくれた。

「なんだからすごい霧ですよ」

「雲が降りてきたんだ。今日は降るかもしれないね」

バルコニーの下、庭の様子さえ定かには窺えないほど、ひどい煙りようだった。家の中を片付けるのに精一杯でとても庭まで手を付ける余裕はなく、荒らされた惨状を今だけでも見えなくしてもらえるのはありがたかったが、家の周りがどうなっているかもわからない。完全な白の世界に閉じ込められたかのような光景だった。おまけにベッドの中からは感じられず、また窓の外に出るまで気付かなかったが、外の空気は水の気配をはらみながら鎖のように結実して吹き溜まっている。寝起きの体温を奪われて身震いをひとつ、私は予感がやがて現実となるのを確信した。

「これは、雪になるな」

「中に入りましょう」

すでに昼の頃だろうに、眠りから冷や水を浴びせられた私は涼の言葉に抗うべくもなく従い、家の中に退避した。木造家屋の我が家は暖かく、そんな私を癒してくれたが、しかし取り囲む雲は今に冷気を纏ってその身を千切り、白い結晶となって舞い降りてくるだろう。一階においてリビングの時計を見れば、確かに午前11時間近。これより先で雪が降れば、雲にもよるが、明日の朝にかけて大雪になるかもしれない。

「涼、家に戻るなら今のうちだ。帰れなくなるかもしれない」

薬缶に水を汲み、火をかけていた涼は振り向いて一度窓の外を見やり、少し考える仕草を見せた。

「さっきまでそれを考えていたんですけど、こんなに濃い霧の中じ

や道に迷いそうで、帰るのも危ないと思うんです」

「雲だから下まで行けば問題はない。雪が降ってしまつとそれこそ身動きが取れなくなる。なにより、きみはもう二日も戻ってないんだ。このままというわけには……」

「私は大丈夫ですよ。家に帰つても、やらなきゃいけないことがあるわけじゃないですから」

「片付けなら、あとは書斎くらいだろう。それなら私一人でもできる——」

と、言い掛けたところで、私は涼に気が付いた。どこか所在なさげに手を組んだり、視線を泳がせている。一瞬、訝しむ私と視線が合い、涼の背後で火にかけた薬缶が沸騰の汽笛を鳴らした。

「お茶を淹れますね」

踵を返して涼は私から視線を逸らしたが、もはや如実に表れていた。私と目があつた瞬間に彼女の頬には紅が差し、背中を向けたとしても髪の間際に覗かせる耳までもが赤くなつていたのだ。どうやら嵐の余韻は未だ残されているらしい。その、言外の拒絶の意さえも、疎い私にまでわかり得るほどはつきりと伝えられたのでは、これ以上口を開くことは憚られた。

とりあえずたばこでも吸つて気分を変えるべきか。そんなことを思ひかけた私は、ふと指先で髪を梳いた涼の仕草に気が付いた。普段、彼女があまりやってみせることのない動きだったからだ。その理由について訊ねることで、私はこの雰囲気を変える糸口を見出した。

「今日は髪をおろしているんだね」

私の知る限り、女性にしてはやや短すぎるほど、ずっと涼はショート・ヘアだった。髪に対するこだわりがあまりなのか、長い髪が重苦しく感じられるのだと彼女は言っていた。しかし、いつの間に艶良く伸びたその髪は正しく流れると言った様子であり、肩に垂れる黒の妖しさもあつて私には新鮮に感じられた。

「実はゴム紐が切れちゃったんです。ずっと放ったらかしにしてた

から、もう煩くって」

やはり涼はあまり好ましく思わないようで、鬱陶しそうに頭を押さえてみせる。私はふと思いつき、ハーブティーの茶葉を混ぜて湯を淹れる涼の背に立ち、その髪に触れた。

「ちよつといいかい？」

そう言つて私はうなじから背中、肩にと広がる髪を丁寧を集め束ねて梳いてみた。細くて柔らかい髪だった。絹の糸を思わせる黒髪は纏めると実に上質な反物を思わせるほどきめ細やかであり、光沢を放っている。

「あんまり手入れしてないから、バサバサじゃないですか？」

「そんなことはない。綺麗な髪だ」

気恥ずかしそうに俯いた涼の後頭部に、束ねた髪をくるりと巻いてまとめると、私はその中に縞瑪瑙の飾りのついた髪留めを差し込んだ。手を離すと、涼の黒髪は解けてバラバラになることもなく、彼女の頭の後ろで留められ、うなじを露わにした。

「あ、すごい」

まるで手品でも見せられたかのように、涼は纏められた髪に何度も触れ、嬉しそうに振り返って見せた。パタパタとスリッパの音を立てて洗面所に駆けていき、鏡で確認して瑪瑙の飾りに触れる。

「どうやったんですか？」

「なんのことはない。かんざしのやり方だよ。留め金はそのためのものじゃないけれど、飾りは似合うと思つてね」

「これ、すごく綺麗です」

涼の髪に差した髪留めは、果たして本当に髪留めだったのか、私はよく知らない。銀か真鍮のような、やや鈍い光を返す金属を打つて形作られ、くびれた留め金の部分だけを見て、私はそれと思つたのである。留め金の先には銀糸を織り交ぜた細い紐に結わえられた黒い縞瑪瑙——オニキスの飾りが提げられている。黒の表面には金の象眼が施してあり、小さな飾りをよくよく目を凝らしてみると何かの文字のような、模様のようなものを見て取ることができる。それ

を意志ある言葉と取るか、奇抜な模様と思うかは判然とはしなかったが、いずれによつてもその瑪瑙の持つ魅力は涼の髪にあつて、彼女を良く引き立たせていると私は思った。

「気に入つたのなら、いずれ本職の物を贈るよ」

「いえ、私はこれで……。これがいいです」

そう言つて涼が見せた笑顔に、私はとても嬉しい気分になった。私にとつて、長い髪は辛い思い出を呼び起こすものでしかなかったのだ。今に至り、涼の髪に触れた私は、しかし深い井戸の底を窺おうとしてもそれらが浮かび上がつてこないのを感じていた。

改めてハーブティーを淹れる作業に戻つた涼を見、私は思ふのだつた。希望は確かなものになった。涼、きみはいま私の希望であり、私はきみに導かれるだろう、と。

+ + +

朝食を済ませ、再び片付けの作業に入つた私たちがまず行つたのは、昨日処分することを決めて分けておいた unnecessary なものをまとめることであつた。これ自体はさしたる労を重く感じさせることもなく、単にまとめてあつた物をゴミ袋に放り込むだけということもあつて呆気ないほど速やかに完了したのだつた。昨日までのことを思えば私の家はようやく一つの事態について収束に向かいつつあることを感じられるくらいにはなつていらしい。家に潜む者共を一掃した後で、むしろ私の家は身を軽くし、快い風が通り抜けて、だいぶすつきりとしたようにさえ思える。と、そんな風にしておよそ片付いた部屋たちを眺めてから向かつたせいなのだろうか、最後まで残されることになつた書齋に至つたとき、私たちはごまかしよ

うもない、ある既視感に襲われていた。おそらく私自身は慣れてしまっているのだろうが、こと涼に至っては書斎に入るなり小さくため息をこぼした。

「ちゃんと片付けてなかったからかもしれないんですけど……」

「もはや私が散らかしたのか、蛆虫がやったのかわからないな」

書斎の惨状は、これまでの部屋の惨状とはやや異なる様相を呈していた。確かに他の部屋と相違なく、ここでは書棚の書物の一切が引っぱり出され、昨日まではその棚も倒されていた。応急的に書棚だけは立て直し、書物たちを元の場所へ戻すのを後回しにすることにしたのだが、それがかえって現状を小難しく思わせるものになっているとも言えた。つまり、床にぶちまけられた本の類が転がる状況が、である。ここはそもそも奴が荒らすよりも先に私が書棚のあらゆる書物を一度ひっくり返しており、諸々の事情により涼が片付ける前に無頼の襲撃にあつたわけだが、こうして棚だけ立て直した書斎に立つてみると被害が出る前と後との差はあまりないように思えるのだった。荒らされる前からどっ散らかっていたために、その実ここだけ唯一被害を免れたのだと言われれば、そんな気がしないでもない。つまり私の散らかし方もずいぶんなものだったわけで、それを蛆虫がもう一度丁寧にひっくり返したとしても、傍目には散らかっているという状況そのものに変化がなかったのだ。

「いや、だが、さしもの私も全部を床にぶちまけはしなかったよ」

「私としては一人でやらずに済んだので良かったですよ」

チクリと刺されたので、私は口をつぐんだ。黙って作業を始める。まずは散らばった書物の中からレタリングの揃うものをまとめ、シリーズごとに仕分けていく作業からだ。実を言うと私はこれまで一度読んだ本を読み返したりすることがあまりなかったのだった。それは私のひとつの特徴だと言われ、自身では大変厄介な悪癖の一つとして数えている、その記憶力が故のことだった。ほとんどの書物は一時の集中と高揚感を与えてくれるものだが、私の場合は一度読んでしまったものに対してそれを過信して再度開こうとすると、

その中身のほぼすべてを覚えてしまっていて、一度は大いに盛り上げてくれたものがひどくつまらないものに感じられてしまうのだ。それはとても苦痛であり、裏切られたような気分になって私を失意の暗がりにはり込んでしまう。と、そうした思いさえもまたしつかりとこの頭は覚えていたため、二度と訪れることのない興奮を惜しんでその本に触れることさえどこかで拒んでしまう。すると私の書斎は途端に、大凡の人間が思い描くであろう、一つの夢でもある大きな書棚いっぱいには整然と並べられる書物たちの、オーケストラと声楽隊の奏でる第九の舞台を連想させる重厚な雰囲気音が音を立てて崩れだし、ただ雑然と、出鱈目に押し込められただけの見苦しい牢獄のような有様に成り下がるのである。そのくせ、古本屋などで目を引くレタリングを目撃しては大きな期待を寄せて購入し喜々として読み込むことをやめないのです、まっこと、独裁者のエゴだけが成し得る不当な逮捕の末に収監される無実で哀れな囚人たちが際限なく増えていく悪政がここまで続けられることになるのだ。記憶力と悪癖の是正はまるで結びつけることができないもので、そうした刹那の快楽と引き替えにその後の激しい後悔と苦悩を続けることを私は一向にやめようとしない。事実、これらの本との付き合い以外においてもその記憶力によって今なお鮮明に思い出される過去への追憶を、あらゆる時に私は繰り返し、繰り返しては絶望に咽び泥に這ったあの頃から離れられずにいる。

「あ、懐かしい。この本はよく読んだなあ」

涼が乱雑に散らばる中から表紙さえ擦り切れそうな一冊を見つけと言った。古い本だった。

そんな灯台の明かりのように幾度も巡っては私の奥底を照らし出す記憶のフラッシュバックから救ったのもまた、涼だった。彼女が私の家に入ったりするようになり、基本的に私は何をするか、一切の注文としてはこなかったのだが、彼女は私が何を言わずともバルコニーを使えるようにしたし、庭に花の彩りを添えた。そしてこの書斎においてもその実績は残されている。それがこのレタリングを揃

えて収めていたという事実だ。数多の書物を整理するのは大変な苦
労であつたろう。いまこうして仕分けようとする私は、いつの間に
ここまで膨大な量に膨れ上がったのか、その数の多さに圧倒されか
かつていた。書斎の部屋一つが完全に紙の束どもで埋め尽くされて
いる。当時は書棚の中とは言え、引つ張り出して整理するのは時間
と労力を相当量注がなければ出来るものではない。少なくとも私は
一人でやるのは御免だ。

「所有者としてこんなこと言うのは良くないが、これをよく整理し
たものだね」

「きちんと揃えていた方が見た目が綺麗じゃないですか」

まったく以てその通りであり、その通りであるからこそ、それを
散らかしたということに私は罪悪感を覚えていた。今回のことで涼
にかけていた苦労の、あくまでもごく一部であろつが、その片鱗に
触れたこともあつて、これに懲りて自身にも少なからず自制する心
を持たなければならなくなることを予感していた。

「まあ、読み始めたなら止められなくて、シリーズを通して読んでい
る間にまとめられたつていうのが本当なんですけどね」

「そうだったのかい？」

確かに時折書斎から涼が本を持ち出して読んでいることは知つて
いた。が、それでも、その他の家事に支障をきたしたことはなく、
一体いつの間に読んでいたのだらう。彼女が家の中のことを取り仕
切るようになる前、あるいは私がこの家に住み始めたのを知つて遊
びに来ていた学生時代からのことを言っているのかもしれない。ま
あ、雇われた家政婦のように他人行儀のまま家の中を機械的に掃除
するだけの存在になつてしまふよりは花を植えることも然り、書斎
の本を楽しんで読んでいるというのなら、私は大いに結構だと思う。
ともかくただ乱雑に、腫れ物に触れることを嫌い臭いものには蓋
をして目を背けることを繰り返していた私にとって、形の上でもま
た涼がそれを整理し、彩りよく変えてくれたことで私は再び彼らに
触れるきっかけを見出し、一つずつ自身の中でケリを付けていくこ

ともしけるようになつていったのだつた。

「そつといえは……」

いくつかのシリーズ物の本をまとめて書棚に収めた涼が何かを思い出して私に問いかけてきた。

「前に整理したときに、ここの壁に何か文字が書かれていたのを見つけたんです。どこだったかしら……」

「そのこの扉の脇にあるやつのことかな？」

私が指差した先を見、涼は「ああ、そうです」と言つて書斎の扉の脇に屈み込んだ。

「これです。壁に彫つてあつて……一度聞いてみたかつたんですけど、これつて何の言葉なんですか？」

涼が示した壁の一文とは煤の染み渡つた木造の壁に、おそらくその色に変わるよりも前に彫られたものであるう、それ自体がすでに壁の一部に吸収されかかりながらも辛うじて読みとることの出来るものだった。おそらく先の丸い、切れ味は悪かつたであろう刃で丁寧な彫られた文字は英文で書かれている。

私は、私が住むよりも遙か昔からこの家が様々な人物たちの雨風を凌ぐ屋根と壁とをもたらした安寧の眠りを与えてきた、小さくも古き歴史を持つた家であることを思い出した。

「それは私が彫つたものじゃないんだ。たぶん前の住人がやつたんだろう」

「そうなんですか？ どうしてこんなことを」

「さあな」

如何なる事情の下で、また如何なる心理を以てしてこんな言葉を、こんな場所にわざわざ刻み込まなければならなかつたのか。それはその人物でなければわからないことであり、私は永劫教えを乞ふこともできないことを知っている。二度とは帰らぬその人が万感の思いを託したであろう言葉の真意にも、私にはたどり着くことはできないだろう。理解し得ることができるのは、その一文がもたらす妖しい言霊の魅力だけだった。

Let the red dawn surmise
What we shall do,
When this blue starlight dies
And all is through.

「紅の暁に思い馳せよ。この蒼き星明かりも絶えて、全てが過ぎ行く時に……。詩歌の断片かもしれないね」

「私には、何か大切な決意を印したものに思えるんです」

多くの人がそれを願いながらも、私のような者が幻想だと言ってしまうものの中に、言葉がある。真実というものが存在し、確かな形を持って横たえられる時、そこに言葉は存在しないのだと思っているのである。真実は言葉では語り表せるものではない。所詮、それは一つの記号であり、ごくわずかな一面のみを取り上げたものでしかなく、真実そのものを語ることなど言葉を使つては決して叶わないのだ。同時に、そうであるからこそ言葉というものは受け取り手によつて様々に変化しうる可能性を常に残しているものであり、もしも涼が壁のこの一文にそれを思うのであれば、それは涼の自由であり、また彼女にとつての真実の一部にもなり得る。私のそれとは異なり、闇に真意を逃したこの英文を読み、そうした感想を思い浮かべられるのはやはり涼であるからなのかもしれない。

「そう思うのなら、大切にしまっておくことだ。いつかきみにも、それと同じ思いを抱くときが来るかもしれないからね」

「はい」

そう言つて納得したように片付けの作業に戻った涼が、しばらくしてまた私に訊ねた。

「この前、言つてましたけど、探し物は見つかりましたか？」

一瞬、それを聞いた私は何のことを訊ねられたのか、思い至らなかった。何かあったろうかと考えたが、頭の中にはつきりとしたものが見出せず、涼が再度この書斎を散らかした理由について私が探し物をしていたと言ったらしいことを教えてくれたが、しかしそれでもなお私にはそれが何であつたか思い出せなかつた。ここ数日の蛆虫絡みと思しき奇怪な出来事に神経をすり減らしていたこともあり、わずか四日ほど前の記憶であるのに、なぜかその晩のことについては明瞭には回帰できない。

「確かに何か探していたような気がするが…忘れてもいいものだったのかもしれない」

自身にも釈然とはしなかつたが、いま頭の中を鑑みるに不足に感じる物はなく、問題はないように思えた。何かに満ち足りた思いを感じることはあまり多くない。が、しかし今をおいてはそうした不定形の欲求の影が忍び寄ることもない。もしかしたらすでに私は見つけてしまっているのかもしれない。涼への思いがそうであつたように。

さて、先ほど私は一度読み終えた本を読み返すことはないと言つた。家の中の全体を平たく見渡してみたとき、おそらくこの書斎に關してはひどく荒らされてはいなかつたと判断できるはずだつた。確かに膨大な量の書物があつたとはいえ、家具は壁沿いに並べられた書棚があるだけで数は手指で数えられる程度しかなく、立て直してしまえば物を収めるのにもこれまでのような容量不足を感じる苦勞もない。そんな、比較的容易であつた書斎の片付けを最後に回したのは、涼がどうしても片付けの最中に気を取られてしまうのだと言つて、やりたがらなかつたのだ。そういうことをしない私にも、およそ理解することは出来る。本というものには他にはない、私たちの知的好奇心に働きかける独特の魔力が存在するのだ。つまり、片付けの途中で自らに思い出があたり、また開いたことのない書物を見つけてしまったとき、特に涼は思わずその表紙を開いて読み

始めてしまうものなのだ。

そして実際、しばらくの間整理と収納の作業に没頭していた私が涼の快活な動きが凍り付いたように止まっているのに気が付いた時には、すでにその魔法は実行された後であった。先ほど見つけた懐かしい一冊か、それとも読んだことのないレタリングが目止まったのか、彼女は書を開いて読み耽ってしまった。いや、正確には少し前からその兆候があつたのだと思う。本を手に取り表紙をじっと見つめていたり、はっとして作業に戻ったりといったことを繰り返していたのも私は視界の端に見ていた。涼自身、危惧していたからこそ、そうならないようにと心に決めていたのだろうに、ついに知性の純然たる欲求に負けてしまったらしい。もう手遅れだとは思つたが、私は一応涼に声をかけてみた。とても純粹に、空に向けたように一切の反応が返つてこない。何事に対しても熱心であることは涼の長所であると私は思っているが、こうして本を読んだり編み物をするときなど、時折涼はこうなってしまう。まるで子供のように一心に集中して周りのことを忘れてしまうのだ。こうなつては気が済むまで読ませてやるしかないだろう。

私はそつと書斎を出て、小休止をすることに決めてたばこを吸いに所定の場所であるリビングの窓辺に向かった。ここでたばこを燻らせることについて涼が快く思っているとは思わないが、しかし私は庭の見えるこの窓辺での一服が好きだった。

たばこに火をつけ、外に目を向けると、ついに空を覆い私の家をも飲み込んでいた白銀の分身たちが舞い降りてきているのが見えた。綿菓子のようにゆらゆらと楽しげに宙を舞い、辛うじて見える庭土の上に降りてなおその身の白を消すことのない、予想したとおりの大粒ではつきりとした雪の結晶が次々に結実し、庭を真っ白に染めようとしている。どこか懐かしい思いがして私は窓を開ける。山の中、風も臍に漂う雪の日に現れる、凜と引き締められた空氣の香りを嗅ぎ、かすかに耳に届けられた結晶の降り積もる儚い音を聞き、いつもの遠い山の情景も、庭の花壇も、私の家そのものまでもが白

くならうとしている。

再び私は自身の中の何者かが声を上げ、その直中より遠雷のような既視感が襲いかかってくるのを感じた。

全てが白に染まる。あらゆる彩りは拭い去られ、闇をも押しコンラストの全てを、この目が認識するものの境界をぼやかしていく。識別することを封じられた私の目は大いなる正午によって決して日の下においては見透かしうるこのできないはずの、奥底へと導かれていく。そう、これはあの時に手にした感覚。

既視感が私の記憶を写し取り、囁きかける。

「探し物は見つかったんですか？」

先ほど問いかけられた、涼の声。いまは書斎で本に夢中になっている彼女の声が私の体の中でリフレインし、骨の髄に至るまで響きわたっていく。狭く浅い入り江に放たれた水の波紋のように、涼の声が、その言葉が広がり、岸に跳ね返っては複雑に、幾重にも重なっては幾度となく荒波と化して打ち寄せてくる。そしてそれは残響を繰り返すほどに、調律された弦楽器の調べを思わせる涼の声を狂わせていく。旋律はねじ切られるように崩れキーが乱高下し、抑揚すら失って、あらゆる者の声へと変わっていく。

「探し物は見つかったんですか？」

「探し物は見つかったんですか？」

「探し物は見つかったんですか？」

「探し物は見つかったか？」

「探し物は見つかったか？」

「探し物は見つかったか？」

響く。

重く、石を踏み砕くような声が――

「黄の印は見つかったか――？」

水底で打ち鳴らすクリスタルのように、終末の問いかけが私の中に共鳴する。この囁きは一体何者の声なのか。重厚にして七色に輝く鐘の響きに打たれ、根本まで燃え尽きようとしていたたばこが指の間から滑り落ちる。足下が覚束なくなり、私はよろめいて窓のサ

ツシに手を付いたが、そのまま床に膝から崩れ落ちた。足が、手のひらが鉛を注がれたように重く感じられる。

また、あの者の気配がする。

荒々しい音を立てて書斎の扉が開け放たれ、壁に激突する。体当たりでもしたかのような勢いで涼が飛び出してきたかと思うと、彼女はそのまま慌ただしくスリッパの音を立てながらどこかへと駆けていってしまった。その血相を変えた様子にただならぬものを感じ、私はもはやまともではなくなった我が身を、手足を引き摺るようにしてやっと体を起こし、這うようにして後を追おうとした。非常な労力を用いて書斎の入り口まで到達したとき、私は床に落ちていた一冊に気が付いた。それは先ほどまで熱心に涼が読んでいた薄いレタリングの一冊であり、巻末までが開かれた状態で床に放り出されていた。首の座らない赤子の身じろぎにも劣るほどの動きで、どうかその本を手にとってみる。

「黄衣の王」

その表紙に記されていた文字を読み取り、私は驚愕した。なぜ、なぜこれがここに、私の家の書斎にあったのだ。こんな恐ろしい物がなぜこの場所に…？

これを書斎に置いた記憶はない。これは二度と開いてはならない書であり、決して触れてはいけないのだと心に誓ったはずだ。呪われた真言を記し、それを読んだ者を混沌の深淵に誘ったと謂われ、事実これを手にした者は例外の一切を漏らさず凄絶に破滅し、いまやその内容を知る者も、疑念を打ち明け語り合う人々すら口を閉ざし絶えて、荒廃の結実とまで叫ばれ恐れられた書。この書の第二部にあたる戯曲がもたらす恐ろしくも蠱惑の物語は人が触れることを絶対に赦しはしない。まだ若かった橘の彼女の身に起きた惨憺たる不幸の影にその存在が囁かれ、事実足るものと私が知るに至り、そ

のあまりにも不気味な存在感に耐えかねて、全ては火に投じられたのではなかったか。しかし、いまこうして私の手に舞い戻り確固たるその存在感でもって表題を掲げた書を前に、私にできたのは、ただ無力に震える手で表紙を閉ざすことだけだった。

まさか――。絶望的な確信が頭をよぎり、私は石を詰め込まれたかのような体を強引に奮い立たせ、涼を呼び、彼女を捜した。廊下を渡り階段を駆け上がって、涼を見つけたのは私の寝室に至ったときだった。涼は今朝まで横になっていたベッドの上で膝を抱えてうずくまっており、私が呼びかけても顔をあげようとはしなかった。私は慎重に彼女の下に歩み寄り、ベッドにもたれ掛かって、顔を近づけるとそっと顔を上げさせた。涼が、その瞳が私を捉えたとき、彼女は何かを言いそうになったが、しかし何も口にはせず、私はその闇が落ちたことを思い知った。もはや問いただすまでもなく、蒼白になった顔や、それでいて酸で溶かし込んだように抜け落ちた表情、色褪せてしまった眼差しを見て、涼が黄衣の王において禁断とされた第二部までをも読み、その過ちに罰を受けたことを理解してしまったのだ。なんとしたことか。どうすることもできず、ただ震える肩を抱きしめ、私は涼が落ち着くのを根気強く待ち続けた。

やがて白の世界にも闇が忍び込む頃になり、涼は目を閉じて静かになった。眠っているのかどうかはわからなかった。

私は涼をベッドに横たえたと、再び一階に降りて書斎に入った。深く暗い谷底へと引き摺り込まれるようにして床に座り、薄く、閉ざされた黄衣の王を開く。私は自らの奥底よりの呻り響く声に導かれるまま、彼の戯曲の最初から最後までを、我が身に刻み込むように一言一句の全てを引き込み覚えるために読み通したのである。

轟裂に軋みあがる激情が万雷のように切りつけ、刺し貫かれた我が身は傷口より吹き出した血の飛沫をようやく抑えることができたものの、しかしなお私は荒い呼吸を繰り返し、また正気を取り戻すことが出来ないでいた。地を揺るがすように心の鼓動が強く、早く打ち鳴らされる。悪意のビーコンが明滅するように大きく深い呼吸を繰り返す肺に冷気が食い込み、胸から全身が凍り付いていくのを感じる。比重の重い金属質に変わってしまったかのような冷たさが手にのしかかり、もはや支えることも出来ずに本が床に落ちる。

ああ、なんとしたことだろう。この戯曲に彩られた言葉たちはいまや私の中で厳粛な旋律を奏でている。よもや私が知り得る言語の解をも越えて、彼の主の姿が私の脳裏に、眼球の裏側に浮かび上がっていく。もはやこの世界のあらゆる言葉を用いても、畏怖の念が、畏敬の思いがすべてを阻み、明確に記すことは許されないとわかっている。しかし黄衣の王なる書において、大いなる決意の下、塔へと挑んだ彼の者の滑稽な勇氣と万死に値した罪深さを思わせるほどの物語が、これを記した者を語っている。純然たる結晶のように澄み渡る言葉が、月を見上げ闇の中にあつて光り輝く言葉が、こうこうと湧き上がり満ちていく泉のほとりに立ちすくむ言葉が、天の福音のごとく奏でられた癒しの言葉が、無知も賢なる者をも等しく理解しうる言葉が、呪われた死よりも恐ろしく圧倒する言葉が、魂の希望無き地獄に、人の心に這い寄る言葉に魅了され麻痺した者へ、怒りも、悲しみや諦観をも青い仮面の下に飲み込んだ主の慈悲によって罪と罰とを、そして赦しを告げている。

私は、否、私たちは心の中に鈍く単調に語り合っていた。同じ書を読み、その全てを知るに至った時から、離れていてもなお互いの心を通じるのを感じる。影が集う気配に気付くこともなく、霧の果て、鏡のように張り詰め、波打つことを忘れてしまったかのような湖面の水の上に立ち尽くす王と仮面の妖しい双眸の見つめる先、ハ

りの岸边に立つ涼と、それに寄り添う私とは、ハストウルとカツシールダの姿であったのだろうか。

すべての謎は明らかにされた。涼が味わった罪の苦さを私自身も知るに至り、それは私の、そして涼の心をも暴いてしまったのだ。黒い教会の鐘が打ち鳴らされるのを聞き、私は声をあげて、腕と足とに熱せられ柔らかく液体に変じた鉛が注がれるのを感じた。焼き印を押され、獣のように呻り悲鳴をあげる私が見た物は、爛れ、沸騰した手が真っ白に膨れ皺を刻んでいく様子であった。体液が濁り膿と化して内包され、鱗のような瘡を形成する。私は全身を震わせ、罪の宣告に絶叫した。腕や足だけではなかった。腹や背、顔までも、私はあらゆる場所から、あらゆる角度から責め立てられ、全身を焼き尽くされていく。苦痛にのたうつことも許されず、ただ罰を受け入れ、世界より乖離した声で叫ぶ。荒涼の風が過ぎ去り、何者かの気配を感じて私が振り返った先にいたのは涼だった。書斎の扉の、初めて会ったときのように影から私を見ている。私は彼女の目に、絶望と悲哀が歪み刻まれたのを見て、全てを理解した。

私だ。私だったのだ。

ハスターの証を探して家を這いずり、彼女を恐怖させ悪夢を与えていたのは私自身…。

扉の影から飛び出し、涼が入ってくる。私は叫んだ。

「来るな！ 涼、来てはダメだ！」

私は骨身を溶かし、もはや垂れ下がり動かなくなった足を引き摺り、まさしく蛆虫のように這って彼女から逃げようとした。書斎に逃げ場などあるわけもなかったが、ただ涼の前にこの身を晒すことだけはしてはなるまいと、私は暗がりを求め闇に消えてしまおうとした。

そんな私の思いさえ通じず、また逃げられるはずもなく涼がすぐのようにして私を抱きしめて離さなかった。

「ダメだ、逃げるんだ。今すぐ、逃げてくれ。ここにいてはダメだ」
動けない私に覆い被さり、頬を伝って涼の涙が私に降り注いだ。

その涙の先に、涼と目が合った。

「ごめんなさい…ごめんなさい、章人さん…」

すでに面影も、その声すらもあらざる者へと変わり、私を私自身足るものとしていたものはすべて消えてしまっただろう。しかし、蛆虫と化した私の冷たくふにやふにやの体にしがみつき、顔を伏せて涼は泣いた。その涙の意味を、謝罪の言葉が意図した先をも、とうに皺の中に埋没してしまったであろう耳に私は残酷な告示を知る。こんなはずではなかった。こんなことはもう望んでいなかった。あの時からもはや離れ旅立ち、未来を見つめ共に歩んでいこうとしていたのではなかったのか。幸せを、ベルトコンベアーを流れる工業製品よりも画一的な、ごくありふれた幸せを手に入れたくて、残された唯一の希望を頼りに、それにたどり着くことも築いていくこともできたのではなかったのか――

だが、もう叶わない。黒い教会の、錆び付いた金属の門が耳障りな音を立てて開かれてしまった。ただ静かにすすり泣き、すがりつく涼に、私は最後の願いを託して懇願した。髪留めを、縞瑪瑙の飾りを投げ捨ててくれ、と。いまや私たちはその古風な象眼細工の飾りがヒヤデスの神秘に彩られた仮面の王へと通ずる黄の印であることを知っている。しかしそうした願いさえも月を望むかのようにすべては無為に散り、届きはしなかった。もはや彼女にそれを髪から外し火の中へと投じるだけの行為さえ許されてはいなかったのだ。闇よりも暗い色に染められた霊柩車がゆっくりと走り出し、私たちを迎えにやってこようとしている。夜闇の霧が集い、より深く、白い暗がりが私たちを包み込んでいく。私は己の全てを賭けて腕を動かした。骨を失い、肉がのたうっただけの体はわずかな動作にさえ応えようとしなかったが、私は唸りをあげ、あらゆる力を振り絞

つて腕をあげ、涼の顔に触れた。もう、何も感じられない。頬を伝い、うなじをかき分けて髪留めに触れ、震える手に満身の力で以てそれを涼の髪から投げ捨てる。解けた髪が羽のように広がり、肩に垂れて涼の顔を隠す。投げ捨てられた髪留めは音も立てず、闇のどこかへ消えた。

雪の降る音が聞こえる。ただ静謐だけがある。

私は、この身の中に車輪の音を聞いた。ゆっくりと、ゆっくりと、それは近づいてくる。脳裏に、輝く洞穴のような壁面の先、黒い十字を掲げたアルデバランのミサに、私は跪いて告解する。カルコサの住人たちが彼の王を讃える聖歌を歌い、それはついにやってきた。私は再び呻りをあげてのたうち回った。抱き留めていた涼を振り切り、沸き上がる灼熱の風が皺だらけの体を焦がさんと押し寄せ、床を転がる。

来る。

「逃げる…すず、か…」

もう涼がどこにいるのかわからなかった。ただ彼女の声だけがすぐ近くから聞こえるのだけはわかり、もしかしたらなおも私にすがりついているのかもしれない。それが私には絶望以外の何者でもなく、十字架に磔にされる思いで、何度も、何度も涼に逃げるよう声にもならない声をあげ叫ぶより他になかった。

車輪の音がすぐ近くで止まる。私の体は引き裂かれ、ついにすべての感覚を失った。涼が悲鳴を上げる。闇よりの使者に先導され、現れた王は半ば宙を漂いながら、青白い仮面を傾けて彼女を覗き込み、鮮やかな黄色の檻を聞く。その中に涼は闇よりも重く、深い魂の墓場を目撃しただろう。恐怖も悲哀も押し、コートの中の闇が涼へと伸びた時、黄衣の王は青い仮面に手をかける。溶けるように消えた仮面の奥に何を見たのか、それを知ることだけは許されなか

った。

+
+
+

雪は深まり、私の家はいま白く閉ざされようとしている。それらが溶けて過ぎ去り、山に緑が舞い戻ろうとする頃に、あるいはもつと先で誰かが私たちを見つけるかもしれない。

雪深く凍り付く中で何が起こったのか、人々はあらゆるものを頼りに調べ、見聞きして想像することだろう。山の中に立つ古い家の書斎で静かに眠りに就いた女性の身に何が起きて、なぜ彼女が死へと到達したのか、その理由も明らかにはできない。この家の主がいずこへと消えてしまったのかと想像をかき立てては、下世話な妄想に酔いしれて肥え太ることだろう。そして涼の脇で、肉か、あるいは気味の悪い塊が崩れてできた山がかつて人であり、人を愛した者であると理解することはできないに違いない。

私はいつ、いつから狂ってしまっていたのだろう。すべてはあの雨の記憶へと還っていく。あの日、霰混じりの雨の中で、襪襪になり果てた互いの心は小さな飾りとなって私のコートに残されていた。

見る者が見れば、どんな方法も論理も思い浮かばずとも、私の身がすでに人のそれでなくなるのに十分な時間の経った死体であったと思うであろう。しかしそれよりも前から、私は破滅していたのかもしれない。

ただその死体が最後に触れようと伸ばした手の先にある、その言葉こそが最後の真実であり、私がついに知り得た真意そのものであった。

Let the red dawn surmise
What we shall do,
When this blue starlight dies
And all is through.

(燃える暁に思い馳せよ、我らは何を成すべきなのか
この蒼の星明かりも耐えて、すべてが過ぎ去ろうとする時——)

二度と目を覚ますことのない眠りに落ちた涼を見、追うこともで
きないことを呪っている。
この呪われた世界を見た者がすべてを封印してくれることを願っ
てやまない。

私はどこで過ちを犯したのか、それだけが——

Fin...

（後書き）

黄衣の王には禁断の第二部が存在します。この小説では前編と後編で分けてありますが、二部構成にはなっておりません。

もしも貴方に勇気があつて、この作品を読み返すことができるのなら、真実を目撃することができるかもしれません。しかし、開いてはならない扉があることも、重々ご承知の上で判断してください。後述の『あとがきにかえて』は扉への一つの鍵となってくれるでしょう。その鍵はおそらく、扉を開くことも、また永遠に閉ざすことも可能にしてくれます。

願わくば、雨の記憶の行き着いた真実が、貴方に暗い影を落とさぬことを――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0512t/>

Dancing in hte yellow 後編

2011年10月9日01時40分発行